

しろうや! 広島城



No.25

学芸員コラム

生き物に込められた思い

江戸時代の絵や装飾品・服飾品のデザインには、多くの生き物が登場します。そして、これら生き物にはさまざまな意味が込められていました。ここではその一部分を刀と絵から見てみましょう。

刀は「刀身」とそれを使用するために必要な「刀装具」に大きく分けることができます。日本刀の刀身の美しさはよく知られていますが、それを飾る刀装具も凝ったものが多く、当時の武士はその「粋」を競いました。刀装具の名称については図1のとおりです。



図1

刀装具には昆虫をデザインしたものも見られます。例えば、写真1は蜂をモチーフとした「目貫」です。実は蜂はおめでたい昆虫とされてきました。みなさんは「封侯福禄」という言葉を御存知でしょうか。これは中国における仕官・昇進を祝う画題のことで、この4文字と音が一緒の生き物である蜂(封)^{えんこう}・猿猴(侯)^{こうもり}・蝙蝠(福)^{ふちがしら}・鹿(禄)を描きます。蜂と音が同じ「封」は「領地を与えて、その支配者とする」という意味です。このため蜂は画題として好まれたのでしょう。蝙蝠は、今でこそ不気味な生き物として少々嫌われていますが、江戸時代には幸福を招く生き物だと考えられており、写真2の縁頭には金色の蝙蝠がデザインされています。



写真1



写真2



写真3

写真3は七福神の1人である^{じゅうろうじん}寿老人を描いたものですが、その背後にも蝙蝠が登場していますね。

さて、写真4の「^{つば}鐺」には鹿の角に向かい合っているとまっている蜂がデザインされています。しかし、これはおめでたい意味ではありません。この図は「鹿の角を蜂が刺す」ということわざを表現しています。鹿の角を蜂が刺しても鹿が何



写真4



写真5

も感じないように、全く平気でいられるという意味になります。つまり、この鐺を付けていれば、その人はどんなに相手に襲いかかれても受け止める事ができるというわけです。

写真5の「目貫」にはカマキリがデザインされています。今も子供に人気のカマキリは、江戸時代に大変好まれた画題で、絵画や装飾品によく見ることができます。

一方写真6の「鐺」にもカマキリがデザインされていますが、同時に車輪も表現されていますね。これは「^{とうろうのおの}蝸螂之斧」という故事を表しています。蝸螂はカマキリのこと、斧はその特徴的な鎌のことを指しています。古代中国の^{そうこう}荘公が狩りに出た時、その車にカマキリが前足を上げて立ち向かったという故事から出来た言葉で、「弱い者が、自分の力をわきまえず、強い者に挑むこと」を意味しています。このモチーフは好まれたようで、多くの鐺が制作されています。



写真6



写真7

最後に蛇や蛙をみてみましょう。写真7の「鐔」には小判を^{くわ}啗えた蛇がデザインされています。皆さんは、「蛇が脱皮した皮を財布に入れるとお金が貯まる」という話を聞いたことはありませんか。また、「蛇に追いかける夢」はお金が入ってくる前兆とも言われています。蛇は悪いイメージもありますが、世の東西を問わず財宝の守護神とされているのです。日本でも冬は地中に^{ひそ}潜み春の到来とともに出現し、脱皮によって成長するので生命力復活の象徴として神聖視され、江戸時代には七福神の1人弁財天の使者となり、金運を授けると考えられるようになりました。

蛙は「生きて帰る」「無事に帰る」の「帰る」に音が同じことから、やはり縁起のよい生き物とされていました。さて、写真8の絵には銭を持った奇怪な人物とガマガエルが描かれていますね。良く見るとこのガマガエルは3本しか足がありません。この人物は^{がま}蝦蟇仙人で、彼が



写真8

金色で三本足のガマガエルと戯れると、蛙が喜んで銭を吐いたという伝説を描いています。3本足のガマガエルは自分の周囲にある財を全てかき集めて啗えていると言われています。今でも3本足の蛙をモチーフとした幸運のお守りが作られていますよ。

このように何気ないデザインにも当時の人々の思いが隠されていることがあります。皆さんも日本刀を見る際にはぜひ探してみてくださいね。

(本田)

※掲載の資料はすべて広島城資料（寄託資料含む）です。

広島城三代目城主 浅野長晟の肖像画が出来ました！



浅野^{ながあきら}長晟は、毛利輝元、福島正則に次ぐ三代目の広島城の城主で、12代にわたる広島藩浅野家の祖です。長晟の肖像画は旧超覚寺所蔵のものは原爆で焼失し、現在は状態のよくないものしか残されていません。そこで、戦前に刊行された広島市史に掲載された模写の写真を参考にして模写を行いました。模写作成にあたっては、広島市立大学芸術学部の日本画研究室北田克己教授のご協力を仰ぎ、広島城学芸員は同じ時代の資料などの事例を確認しながら、もともとの絵が描かれた頃の姿がよみがえるように忠実に再現しました。色鮮やかなこの浅野長晟画像、11月7日まで開催の「広島城収蔵品展」で初披露されています。ぜひご覧ください。

広島城七不思議 その1

～お堀のフナムシ～

唐突ですが！ 広島城のお堀の石垣にはフナムシがいます。

海岸の岩場を集団で、まるでゴキ○○のようにさわさわ動いている、あのフナムシです。ムシといっても昆虫ではなくエビやカニの仲間です。

そんなフナムシがなぜお堀にいるのでしょうか？

広島城のお堀には太田川の水を引きこんでいます。川は満潮時には海水も混じるので、いても不思議はないような気もしますが、問題はどうやってお堀まで来たかです。

フナムシは海水ぎりぎりのところに住んでいるくせに、泳ぐのは苦手で、長時間水につかると溺れるそうです。ですから、川の水と一緒にパイプをとお堀までたどり着くのは無理。もしかしたら卵が循環水にまぎれた？・・・でも卵は、ママフナムシのおなかにくっついていて、^{ふか}孵化してからもしばらくはそのままの状態です。ママと一緒に溺れてしまいます。ペットのフナムシが捨てられたとも考えにくいです。

海岸から街を横切って歩いてきたのでしょうか？

それとも！もしかしたら江戸時代から住みついているのでしょうか？広島城が造られたころは海岸線が今よりもっとお城に近



かったし、人口の川でお城と広島湾がつながっていたので、川沿いに歩いて来ることはできたでしょう。お城見物に来たのはいいけれど、気がついたら川が埋め立てられて海辺に戻ることができなくなってしまったフナムシ達の子孫かもしれません。

いずれにしても広島城七不思議の一つに数えたいと思います。

(岡野)



私が節足動物門 甲殻綱等脚目
フナムシ科のフナムシですが、
何か？

しろうや！

広島城

編集・発行
財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成22年9月30日発行



「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月の平日は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日

臨時休館(平成22年12月13・14日)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト